

Title	インドにおける民俗医療の諸相：ケーララの部族医療を中心として
Sub Title	Aspects of Indian folk medicine : a study on tribal medicine in Kerala
Author	古賀, 万由里(Koga, Mayuri)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2002
Jtitle	哲學 No.107 (2002. 1) ,p.261- 275
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集文化人類学の現代的課題 研究ノート
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000107-0264

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

研究ノート

インドにおける民俗医療の諸相

——ケーララの部族医療を中心として——

—古 賀 万 由 里*—

Aspects of Indian Folk Medicine

——A Study on Tribal Medicine in Kerala——

KOGA Mayuri

1. はじめに

インドには多種多様な医療システムが存在する。西洋医学⁽¹⁾、アーユルヴェーダ(āyurvēda)、ホーミヨーパティ(homeopathy)⁽²⁾、シッダ(siddha)⁽³⁾、ナチュロパティ(naturopathy)⁽⁴⁾、ユナーニー(yunānī)⁽⁵⁾といった、画一的理論のあるものから、部族(tribe)の担う民俗医療まで様々である。

医療人類学という分野が盛んになり始めた1970年代、インドにおける医療システムに関する研究も始められた。これらの研究を大別すると、1) 複数医療システムを比較し、シンクレティズムの中に位置付ける(Leslie 1976, Trawick 1992), 2) アーユルヴェーダの病理観とその変化(Leslie 1992, Nichter 1989, Trawick 1992, Zimmerman 1982, 1992), 3) 薬の商品化(Nichter 1989), 4) 環境破壊と病気(Nichter 1992), 5) 憑依と治療(Clause 1984), 6) 医療の記号論的分析(Daniel 1984), 7) 占星術と病因(Pugh 1984)となる。中でもニッチャーは、スリランカ、インド・カルナータカ州、ケーララ州において長年医療研究に携わって多数の成果を出している。彼は基本的に、途上国の医療システムの問題点を統計

* 日本学術振興会特別研究員

的データで示し、その解決策を模索するという、開発人類学的スタンスをとっている。

研究テーマとして最も多いのは、アーユルヴェーダを対象にしたもので、西洋医学の影響や他の医療システムとの比較、病理観などについてである。アーユルヴェーダの最初の文献『チャラカ・サンヒター』は1, 2世紀頃書かれたものと推定されるが、インドの伝統医学として復興したのは、20世紀初頭のインドのナショナリストと欧米のオリエンタリストたちによってである。そこでは西洋医学に対抗する医学としてアーユルヴェーダの推進が政府によって行われ、1970年の中ごろまでに91のアーユルヴェーダ大学が設立された（フォスター1978）。チェンマーマンは、アーユルヴェーダの古典書を歴史地理、人類学的に分析した（Zimmerman 1982）。復興する以前は特に、アーユルヴェーダの薬草は医師の家庭で作られ、知識は口頭伝承された。だが現在では、大学が設立されてからは、誰もが学ぶことができるようになった。体系の把握が書物から可能であることと、アーユルヴェーダ医師が調査者に比較的協力的である傾向があることから、アーユルヴェーダ研究は数多くなされている。

アーユルヴェーダ研究が盛んであるのに対し、画一的な体系をもたない民俗医療に関しての研究は手薄である。多角的医療システムの一部として調査されるか、アーユルヴェーダの一部として取り扱われているか（Nichter 1989）、あるいは植物学者による薬草治療の研究がわずかにあるのみである。インドの多元的医療システムの現状を把握するには、アーユルヴェーダのみならず、民俗医療の全体像の解明が必要である。そこで、筆者がケーララ州ヴァヤナードゥ県で行った2001年2月3月の短期間の調査⁽⁶⁾から、民俗医療の特徴をみていく。

2. ヴァヤナードゥ県部族の状況

ヴァヤナードゥ県はケーララ州北部の西ガーツ山脈の高原に位置する。

人口 672,028 人 (1991 年) の内、指定部族が 114,969 人と 17% を占める。主な部族 (*ādivāsi*) は、クリチア (*Kurīcyar*)、クルマ (*Kuruma*)、ナーイカ (*Nāyika*)、アディヤ (*Atiya*)、ウーラーリ (*Ūrāli*)、パニヤ (*paṇiya*) などであり、アーユルヴェーダ以外の民俗医療の治療師はこれらの部族に属する。部族の中でもヒエラルキーがあり、クリチアは最も高く、近年まで他カーストとの接触をケガレ (*tingar*) と捉えていた。彼らはチェッティ (*Ceṭṭi*) という地主カーストに農奴として仕え、毎年 3 月に行われるワッリユール・カーヴ (*Vaḷḷiyūr Kāvṭu*) 寺院の大祭では、地主と農奴との間で契約が結ばれる慣習が近年まであった。

ヴァヤナードゥに住む部族たちには、元々土地の所有概念がなかった。だが、イギリス統治時代、ケーララ州北部を治めていたマドラス政府が、第二次世界大戦による食料不足を補うため、ヴァヤナードゥ開拓を進め、ケーララ南部から大勢の人々が土地を求め移住した。そのため、ヴァヤナードゥの非部族には、ヴァヤナードゥ県外からの移住者が多い。

部族はマラッカーリ (*Malakkāri*) や天然痘の女神マーリアンマ (*Māriyamma*) など、ヒンドゥー教とは異なる独自の神々を信仰していた。1930 年代から 60 年代には、キリスト教徒の宣教師が学校や教会を建て、多くの部族がキリスト教徒に改宗した。1980 年代からは、ヒンドゥー至上主義である BJP (*Bharatiya Janata Party*) が、部族のヒンドゥー化に努めている。そのため現在では、以前からあるサンスクリット化⁽⁷⁾ と相俟って、部族の神、マラッカーリはシヴァ神に、マーリアンマはパールヴァティ女神として崇拝されている。

部族は薬草治療に長けていることが現在では知られているが、Gopalan Nair (1911) や Thurston (1909) には、部族の家族制度や儀礼に関しての記述はあるが、医療に関する記述がない。部族の薬草治療が注目され始めたのは、アーユルヴェーダが再発見された 20 世紀初頭以降であるといえる。

3. アーユルヴェーダ

ヴァヤナードゥ県には、政府のアーユルヴェーダ病院が3つ、診療所が19ある。その一つ、南部の州政府アーユルヴェーダ病院に勤める、H医師を尋ねた。H医師は1982年にトリヴァンドラムのアーユルヴェーダ大学を卒業し、1990年からヴァヤナードゥの病院に勤務し始めた。

アーユルヴェーダでは、脈、尿、便、舌、眼、声、皮膚、様相によって患者の様態を診断する。特に、脈診はアーユルヴェーダのみならず、インドの西洋医学やシッダ、民俗医療でも重視されている診察方法である。様相による診断とは、患者の身体的、精神的特徴から、患者がヴァータ体質かピッタ体質、あるいはカパ体質かを診断するやり方である。これらの体質は、体内の3つの病素（ドーシャ、*dōṣam*）、ヴァータ (*vāta*)、ピッタ (*pitta*)、カパ (*kapha*) のうち、どれが優勢かによって決まる。全てのドーシャが正常に機能している状態を健康であるとし、このバランスが崩れると病気になると考えられる⁽⁸⁾。現在では、レントゲンや心電図、スキャンニングなどの近代機器も使用されている。

アーユルヴェーダの代表的治療法であるパンチャカルマ (*pañcakarma*) は、浣腸 (*vasti*)、瀉下法 (*virēkam*)、催吐法 (*vamanam*)、経鼻法 (*sirōr-ēkam*)、油性浣腸 (*asravisruti*) という5つの手法からなる。パンチャカルマの前段階に行うべきものは、プールヴァカルマ (*pūrvvakarmma*) と呼ばれ、断食 (*lamghanam*)、発汗 (*swēdanam*)、マッサージ (*abhyāmgam*)、ダーラ (*dāra*)、シローダーラ (*sirōdāra*)⁽⁹⁾、エラキリ (*elakkili*) などがある。エラキリは薬草を包んだ布を暖めた油に浸し、体にすりつけるという治療で、腰痛や背中痛などに対して行われ、この病院でも頻繁に行われている。だが最近の傾向として、瀉下法や催吐法のような身体的苦痛を伴う治療法は患者に好まれず、マッサージだけの治療が好んで用いられているところが多いといわれている (Zimmerman 1992: 209-210)。

薬の種類には、混合剤 (*kaṣāyam*)、舐剤 (*lēhyam*)、粉剤 (*cūrṇam*)、油、錠剤 (*guḷika*)、などがある。薬は、20世紀初頭までは、各家庭で作っていたが、製薬会社が各地にでき、その薬草園で栽培され、製造されたものが各地の小売店で販売されている。当病院では、病院の目の前にあるナーガルジュナという製薬会社の店の薬が処方されている。

4. 民俗医療

アーユルヴェーダ以外の民俗治療者は、ナーダン・ヴァイディヤン (*nāṭan vaidyan*, 土地の医者) と呼ばれる。ヴァイディヤンの多くは先住民である部族である。彼らの治療法は、生薬 (*paccamarunnu*) の処方が主であるが、時に呪術 (マントラワードム, *mantravādam*) も行う。以下、4人のヴァイディヤンと妊娠儀礼の事例をみていく。

(1) クルマ族の V ヴァイディヤン

彼を尋ねる患者が患っている病気には、喘息、高血圧、糖尿病、リュウマチ、生理痛、蛇毒、咳、頭痛、腹痛、かゆみ、痔、潰瘍、便秘、腎臓結石、胸の痛み、肝炎などがある。中でも多い病気は、ふけ、リュウマチであるという。

精神病はない。診察は、主に触診である。リュウマチはひざをさわり、ひざの上下の辺りで血が滞っているかを調べる。腹痛は、脈診によって判断する。

ナーダン・ヴァイディヤンは各家庭で薬を作っており、それらは森で採集した植物の葉や枝、実を乾燥させたり粉末状にしたりして作る。

V ヴァイディヤンが用いる主な薬草は以下の通りである。

薬草以外に、動物の一部も用いる。亀の頭をあぶって煙を吸い込むことにより、痔を治療する。豚の鼻と舌を乾燥させたものは心臓の痛みを直すために、ペースト状にして服用し、心臓の痛みに用いる。生薬服用中の

表 1. 部族医療で用いられる薬草の例

	マラーラム語名	学名	病名	使用法
1		Adhatoda vasica Acanthaceae (F)	せき 喘息	
2	1. <i>marōṭṭikkuru</i> 2. <i>appakkuru</i> 3. <i>puvattinukkuru</i>	1. Hdnocarpus alpina-Bixaceae 3. Jatropha curtus	リュウマチ, 関節炎	粉末にして油に入れ 沸騰させ, 冷ました もので沐浴する.
3	1. <i>karutenmi</i> 2. <i>āryavēppu</i>	1. Vitex-negandoo, verbenacea 2. Azadirachta, indica, Meliaceae	糖尿病	指で3回つまみ, 湯に入れ朝夕服用
4	<i>kāṭṭumāṭalam</i>		おりもの	木をペースト状に し, 空腹時, 早朝に スプーン1服用.
5	<i>niruriila</i>		リュウマチ, 関節炎	夕方水にいれ沸騰さ せ, 翌朝その水で沐 浴する.
6	1. <i>kāṭṭuparuttiyuteila</i> 2. <i>kāṭṭuvēppinkuru</i>		かゆみ	
7	<i>talutāma</i>	Boerhavia diffusa	リュウマチ, 関節炎	粉末にして油に入れ 沸騰させ, 冷ました もので沐浴する.

注意事項として, 卵, 魚, タマリンドは食べない, 塩, チリは控えるとい
ったものがある.

彼を訪れる患者は, 近隣の村人の他, カリカットやコーチンなどケーラ
ラの他地区からもくる. また, ドゥバイ在住のケーララ人に薬を郵送する
こともある.

生薬の他に, 子供の恐れ, またはプレータム (*prētam*, 死霊) による災
いがある場合は, マントラム (呪文) を唱える.

①子供が怖がったとき, 子供の手首に紐をまき,

*ōmu kāḷi kāḷi kāḷi bhadra kāḷi mahā kāḷi ninne nān pathiccu jīvikum-
bōḷ ennōttu marttva varunna marṛānam śatruvum dūḷi dūḷi yāyi oṭip-*

pōkān

(オーム, カーリ女神, カーリ女神, バッドラカーリ女神, マハー
カーリ女神, 私があなたを理解して生きるとき, 私のところに来る敵
を払いたまえ. 敵は遠くへ, 遠くへ走り去って行く.)

と3回唱える.

②プレータの災い

*arjūnan phālgūnan pārtthan vijayanān visrūtamāyavar pinne kirī-
ṭiyum svā svāttal svā svāttal viṣṇuvum*

(アルジュナン, パールグナン, パールタン, ヴィジャヤン, 有名な
方々よ, そしてキリーディよ, シュワー, シュワー, シュワー, シュ
ワー, ヴィシュヌ)

と唱えて, 灰 (*bhasmam*) を患者の額と胸につけて, 3回に分けて吹きか
ける.

②のマントラムは, 他の地域の一般家庭でも唱えられることから, V
ヴァイディヤ独自のものではないといえる.

突然の死, 病気など, 原因が不明の場合, 神の怒り (*dēvakōpam*) があ
ることが疑われ, 稲占い (*praśnam*) を行う. 木の台の上に稲をのせ, 楕
円状の同心円を作り, それからトリシューラム (三叉矛)⁽¹⁰⁾ の形を作る.
その形状から, 神の怒りの有無を判断する. V ヴァイディヤン, 精神
病患者は来ないというが, 西洋医学で精神病と診断される病気は, 神の怒
りやプレータの仕業であるとされるのである.

通常, 薬草の知識は誰にも教えない, というのがナーダン・ヴァイディ
ヤンの慣習である. 死ぬ前に後継者1人にのみ伝授する. 他人に教える
と, 薬の効果は無くなると考えられている. 実際の目的は, 彼らの権利を
守ることであろう. あるヴァイディヤンは, 生薬を作るときはヴラタム
(*vratam*, 精進潔斎) を行い, 独りで作るという. V ヴァイディヤンが薬
草の知識を筆者に提供してくれたのは, ヴァイディヤンと知り合いの

NGO 職員である女性と訪れたためと考えられる。

(2) カートゥナーイカ族の K ヴァイディヤン

カートゥナーイカ族は蜂蜜作りに従事しているが、治療も行っている。K ヴァイディヤンは家族に薬草作りを手伝われながら、診療所を構えている。診察は主に脈診である。治療には生薬の処方のほか、マントラワードムを用いる。筆者が訪れた日には、頭痛がひどく、他の病院へ行ったが治らず、K ヴァイディヤンの処方する薬を飲んで少しよくなったという妻の夫がきていた。妻は具合が悪くて来られないため、夫が妻の代わりにマントラワードムを受けていた。ヴァイディヤンの助手が、半分に割ったココナツの上に、切った鶏の頭を置き、首から滴る血をその上に降り注ぐ。そして患者の顔の前にかかげる。患者は刀を持ち、鶏の頭の上を切る動作をする。こうすることによって、とりついた悪霊との縁を切るのである。K ヴァイディヤンは、喘息や癌、血液癌などの生薬も売っている。これらは2回分が400 ルピーと、高値で売られている。

(3) 衰退する蛇毒治療

ケーララは以前は森に覆われている部分が多かったため、蛇に噛まれることがしばしばあった。そのような場合、蛇毒専門のヴァイディヤン (*viṣa vaidyan*) が治療に当たった。現在は森林伐採により蛇の被害は減った。また蛇に噛まれても、病院へ行って注射を受けるようになった。

K ヴァイディヤンは、65 年前、トリヴァンドラムからヴァヤナードゥへ移住したクリスチャン (改宗?) である。父、U ヴァイディヤンは蛇毒の名医であった。

蛇毒の診断はまず、ドゥータラクシャナム (*dūtalakṣanam*) といって、メッセンジャーの様子から、患者の様態を判断する。次に噛んだ蛇が何であるかを、傷口から判断する。また、何種類かの薬を与え、その反応を見

て判断する⁽¹¹⁾。

マントラムを唱えて、噛んだ蛇を呼び出す方法があり、U ヴァイディヤンが行っていた。このマントラワードムには誰も立ち会ってはならず、マントラムを唱えたヴァイディヤンの息子は死ぬといわれている。U ヴァイディヤンの最初の息子は死んだため、彼はマントラムの書かれた本を燃やし、それ以降このマントラムは二度と唱えられることはなかった。

他にマントラワードムを行うのは、恐れ、震え、癲癇の症状が現れた時である。これらは悪霊にとりつかれたために起きると考えられる。

彼のもとを訪れる患者は月に5、6人程度であるという。蛇毒治療は主な収入源ではなく、農業に頼っている。蛇毒治療は現在需要が減少し、治療法の伝授も滞っている。

(4) 州政府の奨励した A ヴァイディヤン

A ヴァイディヤンは、ヴァヤナード地方を治めていたパラシ王と共に、独立運動時代イギリスに対して戦った、クリチア族の家系に生まれる。彼は世襲で薬草治療を伝授された。1972年に師である父が死んだ後、独自の診療所を始める。1987年、ヴァヤナードゥ県知事の奥さんの喘息を治して以来、有名になる。1993年から3年間、州政府（ケーララ指定カースト・部族調査訓練発展研究機関）から資金援助を受け、10人の部族に、治療法を教えた。クリチア以外の部族の治療者も、指導に当たった。生徒の年齢層は18歳から30歳で、8人はクリチア・部族、残り2人はクルマ・部族に属していた。彼らの多くは研修終了後独立して治療を始めたが、研修から脱落したものも2人いた。

A ヴァイディヤンは学校へ行っていなかったため読み書きができなかったが、ボランティアによる教育を受け、現在では患者の訪れた日付、名前、病名、住所を記録している。患者が患う病気は、喘息、潰瘍、糖尿病、高血圧、関節炎、癲癇、白内障、肝臓病、頭痛、アレルギー、癌など

である。薬草、治療に関しては、政府の許可がなければ教えられないという。

州政府機関では、薬草治療のワークショップなども行ったが、NGO 側は、治療薬が展示されているだけの意味のないものであったという。

(5) 妊娠儀礼, ガッディガ (*gaddika*)

妊娠5ヶ月目は、悪霊にとりつかれる危険があるとされ、それを防ぐまたは取り除くために、ガッディガというマントラワードムを行う。ガッディガを行うのは、アディヤン族に属するグループである。彼らの1人にマラッカーリ神（シヴァ神）の霊がとりつき、妊婦にとりついた悪霊 (*kūḷi*) を取り除く。家の前のテラスに、一時的な祭壇を設ける。シヴァ神の持ち物である三叉矛を置き、そこにココナッツ2つ、米2キロ、10ルピー、花、キンマの葉とビンロウジュの実を供える。そしてランプに火を灯し、マラッカーリーを呼び起す。3人が打楽器を叩き、1人がそれに合わせて歌う。その間、マラッカーリのとりついた代表者は、水の入った壺をさかさまにしたり、火のついた灯芯を体につけるなどのパフォーマンスを繰り返し広げる。

以前は妊娠中、ガッディガという儀礼を行った後に、生薬を処方した。現在、生薬に関する知識は失われ、マントラワードムのみを行い、出産は病院で行っている。病気、貧困は悪霊がとりつくためになるので、儀礼によってとりのぞかなくてはならないと考えられている。

5. 民俗医療の特徴と展望

ヴァヤナードゥ県における民俗医療の特徴は、西洋医学とアーユルヴェーダと比較することによって、次のようにまとめることができよう。第一に、病因と治療に関して、西洋医学では病気は身体の組織、細胞に何らかの異常が起きて生じるとする。その異常を揮発するのは、ウイルスで

あったり化学物質であったりする。病気の治療は、病原を根絶または排除しようとする、局所的な視点で行う。またアーユルヴェーダでは、病気は3つのドーシャの不均衡によって生じるとされる。ドーシャのバランスを乱す原因には、内部的なものと外部的なものがある。『スシュルタ・サンヒター』には、鬼神学 (bhuta vidya) といって、悪霊や神の怒りによっても生じる病気についての記述があるが、現在のアーユルヴェーダ大学で学んだ医者は、病因を悪霊には求めない。それに対し、民俗医療では、西洋医学で認められている病気を診断する一方、悪霊や神の怒りによっても病気が生じると捉える。それは占いによる診断によって判断され、治療として呪術（マントラワードム）が用いられる。原因を、非人格的な存在に求めるところに特徴がある。

第二に、医療の知識とその伝達に関して、西洋医学は国際的に統一された現代科学の知識に基づいている。これらの知識は医科大学または医学部という専門教育の場で学ばれる。アーユルヴェーダに関しては、20世紀初頭以前は、家庭内または近隣の師から学ばれ、薬草は家庭でつくるなど、土地と密着した民間医療であった。それが20世紀初頭に、ナショナリストとオリエンタリストの影響でアーユルヴェーダ大学が設立され、知識が画一化された。薬も製薬会社のものを処方するようになった。一方民俗医療に関する知識は、原則としてヴァイディヤンのみがもっており、たとえ家族や親類でも、他人に公開することはない。死ぬ前に唯一の後継者に伝えるのみであり、秘儀性が高い。だが今日では、州政府機関によるワークショップや、スクール、NGO主催の会議やマイクロ・クレジット（小口融資）といった活動により、薬草の知識が公開、商品化される機会も出てきた。

このように民俗医療も不変ではなく、西洋医学やアーユルヴェーダの知識が流入し混在しており、また州政府やNGOといった外部の影響で、徐々にその形態を変えている。今後、インドの民俗医療を見ていくうえ

で、それをとりまく環境の変化や知識の制度化を考慮していく必要がある。また、民俗医療とアーユルヴェーダで用いる薬草には共通のものも多いため、民俗医療がアーユルヴェーダに及ぼす影響も考えられる。さらに、患者がいかに治療法を選択するかといった患者側の行動と、それに対応する医療従事者側の行動を考慮し、社会の中で病がいかに解決されていくか、病いとは何なのかということ再考することにより、民俗医療を全体の中に位置づけて捉えることが可能となるであろう。

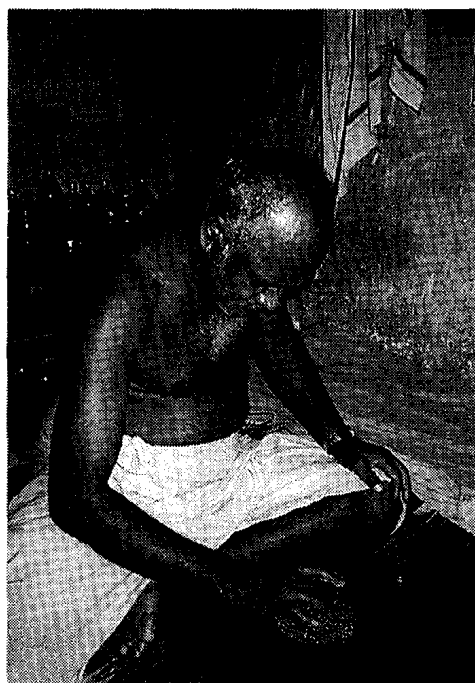


写真1 稲占いをする V ヴァイディヤン



写真2 患者の脈を診る K ヴァイディヤン



写真3 妊娠儀礼, ガッディガ

註

- (1) 南アジアでは、西洋医学を民俗医療やホーミョーパティから区別するため、アロパティ (allopathy) と呼ぶ (Leslie 1976: 359).
- (2) 19世紀にドイツで確立された治療法。生物学的生氣論に基づいた西洋医学であるが、インドではアーユルヴェーダやユナーニーと融合している (Leslie 1976: 359).
- (3) タミル・ナードゥ州のシヴァ派ヨガ行者 (シッダール) の始めた治療法。
- (4) 地、水、火、風、空といった五大元素に基づく病因論と自然治療法。都市部で人気がある。
- (5) ギリシャ医学がアラビアの学者によって変形されたもの。今日、アラブ諸国よりも、インド北部やパキスタンに多く見られる。
- (6) 2001年2月から3月の間に、ケーララにあるNGO団体、OISCAとHiLDAの協力を得て行われた。
- (7) サンスクリット文化をもたない土着の人々が地位向上を図り、ブラーマン文化を模倣すること (Srinivas 1952).
- (8) トリ・ドーシャ理論と呼ばれる。3つのドーシャは、五大元素の組み合わせから成り、様々な機能をもつ。
- (9) ダーラとは、油などの液体を絶え間なく体にたらし療法。シローダーラは、額に液体をたらし続ける。

- (10) シヴァ神の持ち物。
(11) 丸く膨れたらクサリヘビ (*maṇḍali*), 赤くなったらアマガサヘビ属のコブラ (*rājilam*), 両方の症状が出たらヴェーンドラン (*vēntran*, 英名, 和名不明) に噛まれたことが分かる。

参考文献

Claus, Peter

- 1984 "Medical Anthropology and the Ethnography of Spirit Possession" in V. Daniel and J. Pugh (eds.), *Contributions to Asian Studies, Vol. 18, South Asian Systems of Healing*, pp. 60-72.

Daniel, Valentine

- 1984 "The Pulse as an Icon in Siddha Medicine" in V. Daniel and J. Pugh (eds.), *Contributions to Asian Studies, Vol. 18, South Asian Systems of Healing*, pp. 115-126.

フォスター

- 1987 『医療人類学』リポート。

Gopalan, Nayar

- 1911 *Malabar Series: Wynad: Its Peoples and Tradition*, Madras: Higginbotham & Co.

Leslie, Charles

- 1976 "The Ambiguities of Medical Revivalism" in Charles Leslie ed., *Asian Medical Systems: A Comparative Study*, Berkeley: University of California Press, pp. 356-367.
1992 "Interpretation of Illness: Syncretism in Modern Ayurveda" in C. Leslie and A. Young (eds.) *Paths to Asian Medical Knowledge*, Berkeley: University of California Press, pp. 177-208.

丸山 博

- 1993 『アーユルヴェーダへの道』東方出版。

Nichter, Mark

- 1989 *Anthropology and International Health: South Asian Case Studies*, Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
1992 "Of Ticks, Kings, Spirits, and the Promise of Vaccines" in C. Leslie and A. Young (eds.) *Paths to Asian Medical Knowledge*, Berkeley: University of California Press, pp. 224-253.

Pugh, Judy

- 1984 "Concepts of Person and Situation in North Indian Counseling: The Case of Astrology" in V. Daniel and J. Pugh (eds.), *Contributions to Asian Studies, Vol. 18, South Asian Systems of Healing*, pp. 85-105.

Srinivas, M.

- 1952 *Religion and Society among the Coorgs of South India*, Oxford: The Clarendon Press.

Thurston, Edgar

- 1993 [1909] *Caste and Tribes of Southern India*, New Delhi: Asian Educational Services.

Trawick, Margaret

- 1992 "Death and Nurturance in Indian Systems of Healing" in C. Leslie and A. Young (eds.) *Paths to Asian Medical Knowledge*, Berkeley: University of California Press, pp. 129-159.
- 1992 "An Ayurvedic Theory of Cancer" in M. Nichter (eds.) *Anthropological Approaches to the Study of Ethnomedicine*, U.S.A.: Gordon and Breach Science Publishers, pp. 207-222.

矢野道雄訳・編

- 1988 『インド医学概論チャラカ・サンヒター』朝日出版社.

Zimmerman, Francis

- 1982 *The Jungle and the Aroma of Meats: An Ecological Theme in Hindu Medicine*, Delhi: Motilal Banarsidass Publishers.
- 1992 "Gentle Purge: The Flower Power of Ayurveda" in C. Leslie and A. Young (eds.) *Paths to Asian Medical Knowledge*, Berkeley: University of California Press, pp. 209-223.

Discover Wayanad: The Green Paradise, 1995, Wayanad: District Tourism Promotion Council.

Janakiyasūtraṇa Prastānam Jillā Pddhati Vayanāṭu Jilla, Jillā Āsūtraṇa Samiti Vayanāṭu. (マラーヤーラム語)